

優秀賞（国土交通事務次官賞）

△作文（中学生）の部▽

『私たちの生活の安心の影で』

群馬県前橋市立第三中学校 一年 大村 遙

時折、テレビやインターネットなどを通して、土砂崩れや土石流などで壊された家や被害を受けた町や村の様子を目にします。汗水流し大切に育んできた田や畑を、一瞬の出来事で失った人。変わり果てた風景に、ただただ立ちつくす人。流れでた大量の土砂の中、行方不明となった人を懸命に探す人々。それまでのありふれた生活が、どんなにかけがえない生活だったのか、誰もが思い知らされたに違いありません。

けれども、そんな土砂災害がどんなに恐ろしいものなのか私には実感がありません。土砂崩れや土石流がどんなものか、本やインターネットで調べてみて、その大きさや災害の起きる仕組みは分かりました。分かったつもりでいます。けれども、それは目や耳を通して知った知識でしかありません。ニュースで目の当たりにする災害の様子も、私の身のまわりの実感のある生活の中で起こったものではないのです。

私は利根川にほど近い街に住んでいます。私の家の近くは住宅や田畑ばかりで、土砂崩れを起こしそうな山や崖など見当たりません。車で郊外の農村に行ってみても、私たちの生活に襲いかかってくるような山など、あるようにも見えませんでした。そこで私は、私の住む街は今まで土砂崩れなどの災害がなかったのか、家で聞いてみました。すると、その答えは意外なものでした。

私の街の中心部には大きな川が流れています。その川は深く、広く、川底も岸もコンクリートやブロックで固められています。川の勾配や水の流れる断面の大きさもだいたい同じで、どう見ても人間が造った、整備した川だということが分かります。けれどこの川、普段は子供でも渡ることができるくらいの少しの水しか流れておらず、雨の降った後でも川の水量は少し増える程度です。実はこの川が以前に大きな災害をもたらしたのだというのです。

その事を聞いて私は、半分信じられませんでした。すると両親はその川の上流に私を連れて行ってくれました。そこには私が小さい頃から慣れた自然の川がありました。けれども、言われてその川をよく見ると、草や木に囲まれ、コケに覆われた小さなダムがありました。ダムとは言っても、水を満々と貯えたものではなく、川上から流れて来た土砂や流木を貯めたあまり大きくないものでした。そして、もっと目をこらすと川岸にも、人の造った石垣やコンクリートの土手みたいなものがありました。よく見ると、そんな人の造ったものは川のずっと上流にまで続いていました。

その川を見終わって家に戻る途中、別の川には本当に大きなダムがあり、その上流は水も土も何も貯まっていますでした。また、裏が山になっているお家のそばには、コンクリートの壁が家を守るように立っていました。そんなダムやコンクリートの壁は危ない場所や昔災害が起こった場所に造られているんだと思いました。私の街の中を流れるコンクリートでできた大きな川も、川上の山から川下の街までの間、色々なダムや石積みが協力しながら、昔起こったような災害が再び街を襲わないように、守ってくれているんだと感じました。

それからというもの、私はダムなどだけでなく、人が防災のために造ったものに気を付けるようになりました。田んぼの中の盛り上げられた土手、家の裏の落石フェンス、危険な場所を知らせる看板など、実は私の身近な場所にも、防災のために造られたものはたくさんあったのです。当たり前のことですが、これらはみんな人間が造ったものです。私は、こんな人の仕事や街を守ろうとした人の気持ちに守られながら生活してきたことに驚き、そしてありがたいと思いました。

災害から守られた環境の中で毎日を過ごしている私たちは、災害は他人事だと錯覚してしまいがちです。けれども、昔は災害と隣り合わせで生活していた人達の生活を思い、私たちの住む地域にどんな災害の危険があるのか普段から知っておく必要があると思います。そして、いざと言うときにどうやってみんなの身を守るのかを考えて話し合っておく必要があると思います。私たちの生活の安心の影で防災のための施設が私たちを守り、災害のための施設が私たちを見守り、災害の危険が息をひそめているのだから。